

生徒の運動認識に関する実践的研究

－動感の言語化とパフォーマンス変容を視点として－

清水 将貴（東京学芸大学）

1. 目的

本研究では、言語活動による生徒の運動認識が運動技術・技能向上へと、いかにしてつながっていくかについて明らかにすることや、生徒同士による言語活動を充実させる明確な手立てについて検討することを目的とした。

2. 研究方法

- 1)対象者：千葉県松戸市立 T 中学校第 1, 2 学年の陸上競技部に所属する生徒 9 名
- 2)調査方法：走り幅跳びによる実証実験及び質問紙調査を行った。質問紙には、「整理のしやすさ」「説明のしやすさ」「二人称的アプローチのしやすさ」という 3 項目で、回答を求めた。
- 3)分析方法：ふきだし法、話し合い活動の記録をもとに、生徒がどのように運動学習の変容を遂げたか、動感に着目して検討した。

3. 結果と考察

1) ふきだし法による動感変容

ふきだし法の分析から、被験者である 9 人全員が動感を変容させていったことが推察され、動感を変容させていく言語化の過程には、「手をあげる」のような抽象的な表現から「高い鉄棒につかまりにいくイメージ」のような具体的な表現へと変容していった。また、できなかったことができるようになるなど、技能が向上した時の動感の言語化には共通して、「グイッと前に倒す」「スーッと滑らせる」など、どのように身体を動かしていくのかという内観に迫った表現をしていた。さらには、言語活動の際に同じグループの仲間が発言したことが、動感を変容させるきっかけとなって

いたことから、「実践→言語活動→実践」というプロセスが新たな動感を促し、動感変容へとつながることが示唆された。

2) 言語活動の充実

質問紙による分析から、実験を行った 5 日間の活動を通して、どのグループにおいても充実度の高い数値を表していることが推察された。このことから、ふきだし法を用いた二人称的アプローチによる言語活動は、動感の素材が異なる者同士のコミュニケーションを成立させることと結びついていくことが推察された。

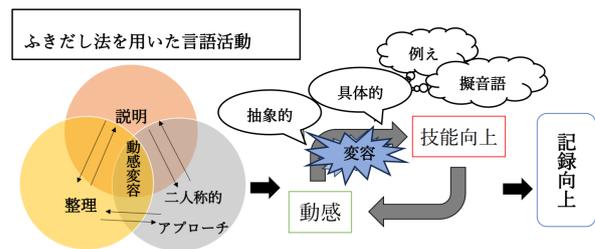


図1 ふきだし法を用いた言語活動による動感変容構造

4. 結論

言語活動による生徒の運動認識において、抽象的な表現から具体的な内観に迫った表現へと動感を変容させ、運動技術・技能向上へとつながっていることが明らかとなった。また、ふきだし法を用いた二人称的アプローチによる言語活動は、動感素材が異なる者同士のコミュニケーションを成立させ、お互いの学習者に新たな動感を促し、動感変容へとつながることが明らかとなった。

5. 主な参考文献

- 1) 柴田俊和（2015）運動指導と身体知，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要，pp.9~17

